

# 台湾原住民族の工芸品に付された名前——創る主体と所有の主体

野林 厚志のばやし あつし

民博文化資源研究センター

工芸品は有形だが、それが作られる過程ではさまざまな無形の要素がかかわっている。素材についての知識や手の動かし方、表現を豊かにする技巧、そして工房内外の人間関係。作品の図案もそのひとつだ。

## パイワン族の刺繍を学ぶ

筆者が台湾のイノシシ狩猟についてフィールド調査をしていたときのことである。何がきっかけだったかは失念したが、わたしが居候していたパイワン族の一家の娘婿が、自分の親戚がパイワン族の伝統的な衣装を作っているで紹介すると言われ、ある工房を訪ねたことがあった。そこでは、主人である女性が刺繍を施したパイワン族の衣装や、カバン、小物を制作し販売していた。当時、あまり台湾原住民族の工芸やもの作り

に関心がなかった筆者は、こういったところから新しい製品が生まれるのだなという程度の感想しかもたなかった。それから一〇年ほどたった現在、わたしはこの工房の二階に寝泊まりをしながら、日中は刺繍を習得するフィールド調査をしている。師匠はもちろん件の女性である。刺繍を勉強したいと彼女に伝えたところ、「ここにきてから一〇年ほどになるのに、そんなこと今まで一言も言わなかったじゃないか」と冗談半分に説教をくらってしまった。筆者の言

い訳は、針仕事などはあまり好きではないが、じつにさまざまなものを作られている様子を見ているうちに、自分でも作ってみたいと思いはじめたということである。また、刺繍の手法や針を知ることで、民博が所蔵している台湾の原住民族の衣服に施された刺繍の技術の歴史的な変化がわかるようになるのではないかと考えたからである。紋様の形態や種類、モチーフの変化を論じる前に、刺繍そのものを理解しなければ何もわからないというのが、館蔵資料の調



工房での制作の様子

査やそれらを使った展示を重ねてきた筆者が出したひとつの結論だったのである。

## 無形文化財保持者のふるまい

筆者が弟子入りしたこの女性は、じつは台湾の政府関係機関が認定した原住民族工芸の無形文化財保持者である。台湾と日本とでは制度が異なるので、人間国宝は言い過ぎかもしれないが、原住民族の工芸作家としてはかなり有名で、作品は海外の展示会に出品され、台湾の企業が広報に彼女の作品を使うことも少なくない。民博の常設展示場にも彼女の工房で制作されたパイワン族の首長の衣装が展示されている。筆者が担当した「台湾原住民族」のコーナーで、現代のパイワン族の伝統衣装の制作を依頼したのである。彼女は今まで作ったことのないあらた



外部から発注を受けて作ったパイワン族のモチーフがほどこされたベスト

な刺繍の図案をこの衣装のために考えてくれた。工房で働く助手もこの図案はとも優れているから、きつ



民博に展示されているパイワン族の首長の衣装

と、いい作品に仕上がると制作過程で話してくれていた。そのことばに違わず、世界にふたつとない一点ものの衣装を作ってくれた。

ところで、彼女の工房にはいろいろな人が出入りする。一般の観光客、彼女の評判を聞いて作品を買ったり買いに来たりする人、彼女に刺繍を教えてもらいに来

る人、彼女の作品を仕入れに来る土産物屋等々、じつにバラエティに富んでいる。彼女は客が置いていった名刺を机の上の透明のカバーマットの下にひたひたに、工房内の壁や扉にずらっとならべている。この名刺を見るだけでも彼女の社会関係の広が

## ものに付された名前のもつ意味

そんな優しい彼女も夕食の後にタバコを燻らせながら筆者とだべっているときは、ちらちら本音を覗き出す。時折、耳にするのが自分の刺繍の図案が勝手に使われることへの不満である。パイワン族の刺繍の図案は基本

的なモチーフは共通しているが作り手の個性が出る。熟練した作り手が熟慮し工夫をした図案が刺繍でほどこされた衣装やカバンは商品的価値も高い。そうした独創的な図案はときとして他人に別のコンテンツの素材にされてしまう。以前は図案を見ればこれは誰その作品だということがあったものだが、今はそうした範囲を越えて彼女の作品が動いているために、知らないあいだに利用されることもある。自分が創ったものであることを示すために、作ったものに自分のイニシャルロゴを刺繍で縫い込むようになったのだ。

「誰が創ったのか」「誰がもっているのか」。ものに付された名前にはこのふたつの要素をあらわす機能がある。つまり、作るといふ行為と所有という状態のふたつの主体であり、文化遺産の無形性と有形性という属性がよくあらわれているのではないだろうか。